トビタテ!留学 JAPAN 報告書

学問の確立と専門医制度輸入の第一歩

RINA NABETA ▸ [会社名を入力] ▸ [日付を選択]

理想の獣医療実現を目指して

学問の確立と専門医制度輸入の第一歩

鍋田　梨奈

所属：宮崎大学農学部獣医学科 6 年

留学先と留学期間

国：アメリカ合衆国

地域：コロラド州フォートコリンズ

大学：コロラド州立大学、他

期間：2014 年 9 月 2 日 ～ 2014 年 11 月 21 日

留学の目的

高齢化が進む日本では動物、特に伴侶動物への価値観が変化してきており、求められる小動物獣医療のレベルもより高度なものとなっている。そのニーズに応え理想の獣医療を実践するためには、高度医療機器の導入などハード面ばかりに目を向けるのではなく、ソフト面、つまり獣医師自身のレベルを向上させることが必須である。

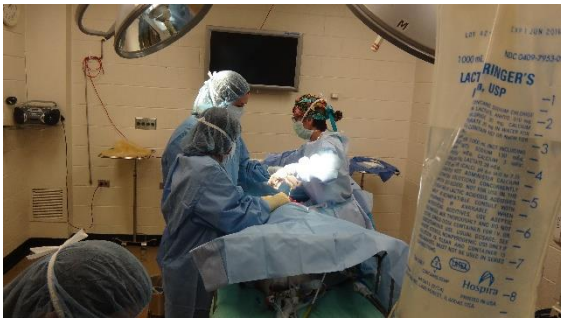
病理学は生体の反応を読み解き、病気のメカニズムを解明する学問である。臨床では主に確定診断を下す役割を果たし、治療方針を決めていく際の最も強力な根拠の一つとなる。

日本では現在、獣医学教育の時点で臨床病理学という学問は確立されておらず、専門医も育っていない。一方アメリカでは、臨床病理学という学問やその専門医制度が確立されており、教育システムも洗練されている。臨床現場では世界で最も最先端の獣医療を実践しており、大抵は彼らの基準＝グローバルスタンダードとされている。

私は、日本獣医療のレベルアップ、理想の獣医療実現の鍵は臨床病理学にあると考え、学問の確立と専門医制度輸入のヒントを探すため、アメリカへ渡った。

留学の結果と成果

3 ヶ月弱の短期アメリカ留学のうち、最初の 1 ヶ月間はコロラド州立大学付属の動物医療センターと腫瘍センターにおいて、それぞれ軟部外科と腫瘍科を回った。アメリカでは最終学年は Clinical year に位置づけられており、学生は各科を 2 週間ずつローテーションで回る。私は彼らと一緒に、問診や一般身体検査の補助に入ったり、初めての手術助手に入ったりした。



初診はまず学生が問診に入るため、毎日たくさんの新しい症例に遭遇し、インフォームドの場にも数多く立ち会った。獣医師たちはオーナーの感情に寄り添いながらも豊富な知識と経験から理路整然と事実を伝え、動物の状態や性格を加味しながら科学的根拠に基づき複数のオプションを提示し、その中からオーナーと動物双方にとってベストなものを選択して治療を進めていた。その様子を目の当たりにするにつれ、これこそが自分の目指す理想の獣医療ではないかと感じた。そしてその科学的根拠に当たる部分に、臨床病理学が大きく関わっている事実とその影響力の大きさを肌で感じ、この分野を発展させることが日本獣医療全体のレベルアップに繋がるという確信を得た。

学生の授業や実習にも参加し、日米のスタイルの違いを感じた。アメリカでは学生自身がより実践的な経験を積めるよう、各人にタスクを課すなどの工夫がなされ、また主体的に考え議論し合う雰囲気を教授や講師たちが作り出していた。一方的に情報を与えるのではなく、必ず学生に問いを投げかけ、彼らが自分自身で答えを見つけられるように導いていた。間違えることは恥ずかしく、良くないことだと考える指導者はいなかった。自ら発信しないこと、自分の意見を持たないことを危惧すべきであり、最初の間違いからどう正しい道へ方向修正していくか、その方法論を身に付けることこそが何よりも大切なのだと実感した。

残る２ヶ月は病理学、中でも日本ではカリキュラムに組み込まれていなかったために学ぶことの難しかった臨床病理学をメインに、実際の診療業務に携わったり、授業や実習に参加したりして診断症例を積み重ね、学会に出席して広い知見を得た。さらに留学中には多くのアメリカ獣医病理学専門医やその候補生であるレジデントたちと交流した。その中で、専門医プログラムや教育システム、学問の位置づけなどについて最新の情報が得られた。アメリカではビジネスにおいても人と人とのつながりが重視されており、現地に赴き顔を合わせながら業務を共にすることで、アメリカ獣医病理学専門医を始めとする各方面と人的ネットワークを築けたことは、将来的な日本への獣医臨床病理学専門医制度輸入と同学問の発展に繋がる大きな成果となった。

３ヶ月弱という短期間の留学で得られた知識や技術はこれから身に付けるべきもののほんの一部でしかないが、その間の時間の流れは非常に濃密で、多くの経験を積むことができた。何よりも、今回の留学で得られた人脈は、一生涯大切にしていきたい宝となった。『一つの技術を修得するためには、どんな時でも常に同じように反復を積み重ね、自らのミスを違和感として自然と気付けるレベルまで、日々ひたすら研鑽を重ねていかな

ければならない。』という Dr. Dan、『Don't forget your patient!ーデータや数値だけに捉われるのではなく、目の前の患者を診ることー』という Dr. Elena。彼らは私に獣医師としての心構えを諭すだけでなく、指導者・教育者とは何たるかを示してくれた。他の名前を挙げきれなかった偉大な獣医師たちをはじめとする、留学を通して関わった全ての人に感謝し、今後も彼らとの貴重な絆をより強いものへとしていきたい。

日本発信プロジェクト

日本の中でも特に出身大学のある宮崎を広めることを意識し、宮崎の郷土料理や特産品を用いた和食を振る舞ったり、名刺に宮崎の特産品や景勝地を載せて配布したりした。材料を現地調達してレシピを伝える、お箸や折り紙、筆ペンをプレゼントするなどして、私の帰国後も日本とのつながりを感じてもらえるよう工夫した。

おまけ

休みには新しい友人と観光に出かけたり、ホームステイ先の子供たちと遊んだり、ヘブライ語を教えてもらったり、ロッキー山へ人生初めての本格キャンプにでかけたり、トビタテの面接で出会った友人を訪ねたりと、勉強だけでなく遊びも大いに楽しんだ。

コメント

新たな自分へのワクワク、広く大きな世界へのドキドキ。留学中は、日本に留まっていたら味わうことのできない、キラキラとした心に残る瞬間にきっと出会えます。一方で、勢いだけでは乗り越えられない、不安や孤独に苛まされる時、人生の選択に迷う瞬間が訪れるかもしれません。そもそも、留学前から弱い自分と戦わないといけないかもしれません。弱気になった時、トビコム勇気をなくしかけた時、そんな時こそ、考えるよりまずは半歩でも前へ。

人それぞれ様々な形の留学があると思います。留学前から明確な目的を持ち、留学中や帰国後すぐ目に見える形で留学の成果を出せればそれはとても素晴らしいことです。しかし、小さな勇気を振り絞った人生初めての留学、小さな第一歩が、これから生涯をかけて挑戦していくだろう大きな夢へと続く道となれば、それも素晴らしい成果ではないかと思います。

宮崎大学の学生が、広く世界に羽ばたいていくことを願ってやみません。